

博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2013参加記

九州大学 総合理工学研究院 教授

谷本 潤

昨年度の初回は東京・有明で東工大が幹事で行われたリーディングプログラムフォーラムが、2014年1月10日(金)、11日(土)両日わたってJR大阪駅に隣接するナレッジキャピタル・コングレコンベンションセンターで開催された。大阪大学が幹事である。リーディングプログラムの公募は今年度で打ち止めなので、総計62の全プログラムの関係者と学生が一堂に会する最初の機会になった。

昨年同様学生は学生セッションへの参加が推奨された。今回は、「ネクストビジョナリー」の冠のもとに、未知のデバイス、sustainable of resource or infrastructure、社会的格差・対立-Health issues、社会的格差・対立-社会・環境格差の克服、Japan and/or global、now and futureの5つのサブテーマに別れて、提案を練り、準備し、プレゼンテーションするコンペが行われた。わがGAの学生諸君は留学生7名、日本人3名がフォーラムに参加したが、今次もプログラム・チームとしてのコンペへの参加は見送った。次年度を期待したい。

初日冒頭日本工学会会長・柘植綾夫氏から基調講演があった。2日目にはJSPSの安西祐一郎氏からリーディングプログラムの現況、就中、評価の概容などが説明され、その目指すものが改めて確認された。特に筆者に残ったのは、定員の充足が重要でないとは言わないが、それよりもこのプログラムの真価が問われるのは、コース生の修了後キャリアであり、如何に「博士号取得、イコール、アカデミックへの入口」との既成概念を打ち壊し、彼らが産業界の前線で次世代リーダーとして活躍してくれるかである、との言明だろう。いまだ私たち側にも学生側にも従前の常識が根深く巣くっているのを知る身としては、言う思うは易いが行うは難く、と云ってプログラムを実施している本人としては、なんとか帳尻はつけねばならず、なかなかにして頭が痛い問題なのである。

プログラム担当者間の意見と情報交換の場であるスタッフ・ワークショップは、幾つかの分科会に別れて行われた。筆者は、「教育プログラムのグローバル化」と原田センター長がコメントーターとして登壇された「質保証・評価・選抜」の質疑に加わった。

グローバル化に関しては、他プログラムの現況を知って、国際化をプログラムアジェンダの重要な柱に掲げている私たちは、なかなか健闘しているとの印象を持った。国際化の究極として、コース生定員10名のうち9名が留学生という物凄いプログラムもあった。どこの国の高騰教育かと苦情は出ないのだろうか。人ごとながら心配になった。

後者の質保証・評価・選抜については、つくづく上には上がいることを思い知らされた。優秀なあまたの志願者集団の中から、最優秀者を選抜し、教育期間中のQEで基準に達しなければ容赦なくふるい落とす、それこそ真のエリート教育には必須である、との理想型をほぼ地で行っているようなプログラムもあった。無論、医学系のプログラムでは、学生は概ねMDであるから既にしていっぱしの専門職業人なので、そのようなプロセスが成り立ちやすいと云うことがあるのだろう。他プログラムの志願者数の実勢値が示されて、日夜どうやったら日本人コース生へのプロモーションを昂進させ得るかに頭を抱えている身には別世界のハナシのように聞こえた。

粗く丸めると、一勝一敗という印象だろうか。

畢竟するに、手持ちの資源でわたし達の出来ることを精一杯やるしかないということである。少なくとも試行錯誤するだけの機会を与えられているだけ多とせねばなるまい。

